

タイトル	ソウル大学蔵『源氏物語』須磨巻の翻刻と考察(下)): 校訂による本文変化
著者	保坂, 智; 呉, 美寧
引用	北海商科大学論集, 10(1): 15-38
発行日	2021-02-20

ソウル大学蔵『源氏物語』須磨巻の翻刻と考察(下):校訂による本文変化
**A Reproduction and Analysis of Characteristics of Writing in the Second Part of the
 Suma Volumes of “Genji Monogatari” Housed at the Seoul National University
 (Part II: Alterations to Writing in the Text)**

保坂 智 HOSAKA, Satoshi 呉 美寧 OH, Miyoung

要旨

本稿は、ソウル大学校中央図書館に所蔵されている『源氏物語』須磨巻後半部を翻刻し考察を加えたものである。前稿において須磨巻前半部を翻刻し本文の系統を明らかにしたが、本稿では引き続き須磨巻後半部の翻刻を行ない、本文校訂に関わる書き込みを中心に分析した。その結果、日本大学蔵本（三条西家証本）を書写した本文に補入や見せ消ちなど校訂が加えられて、肖柏本・横山本を取り込んだ本文へと変化したことが明らかになった。

キーワード:『源氏物語』、ソウル大学、書き込み

Abstract

This paper is the second of two studies that examine characteristics of writing within the reprint of the Suma volumes of “Genji Monogatari” housed in the central library of the Seoul National University. The first study examined writing within the first half of this reprint and found the words to be identical to those contained in the collection of Nihon University's “Genji Monogatari” (also known as the Sanjo Nishike Books). This current study focused its analysis on alterations to writing within the second half of these Suma volumes. Results showed that writing within the second half of the Suma volumes at Seoul University contained additions and erasures as a result of corrections made to the text, having used Shokaku Bon and Yokoyama Bon as references when making these corrections.

Keywords: “Genji Monogatari”, Seoul National University, Writing

1. はじめに

本稿は、韓国のソウル大学校中央図書館蔵『源氏物語』（注1、以下ソウル大本）須磨巻後半部を翻刻し、その本文と書き込みを考察するものである。

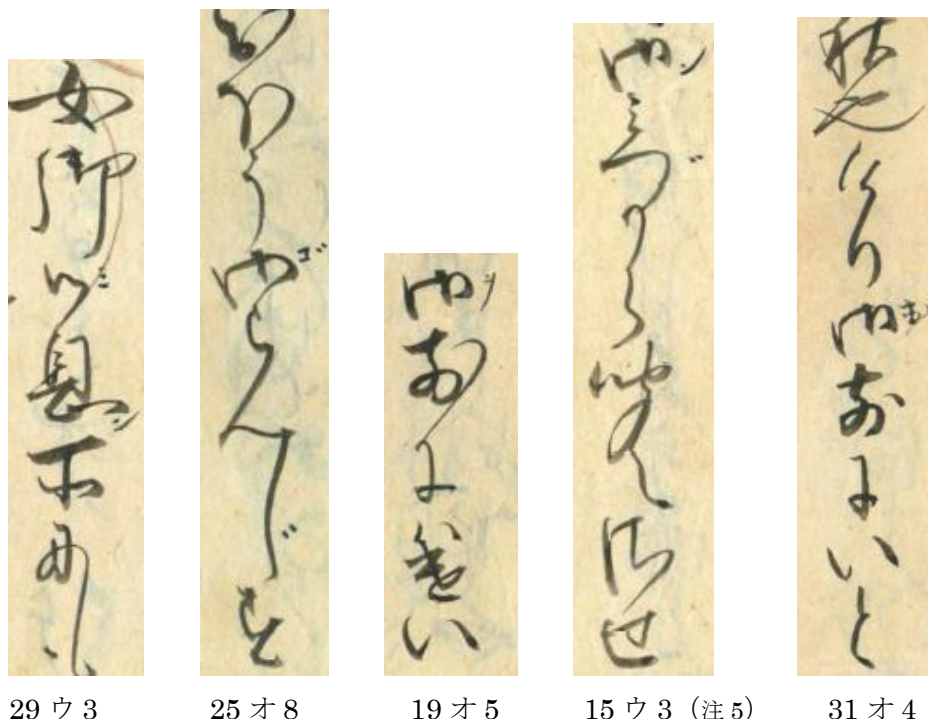
前稿（注2）において、ソウル大本のうち最も書き込みが多いと思われる須磨巻の翻刻を行ない、ソウル大本の特徴と本文系統を分析した。翻刻の掲載は前半部のみとしたが、分析は巻全体にわたって行なったものである。その成果として、漢字使用率の高さ、日本大学蔵本（三条西家証本）の異本注記まで書き込んでいることが明らかになった。本稿では、引き続き須磨巻後半部を翻刻するとともに、本文校訂に関する書き込みを中心に調べることで、校訂による本文変化の過程を明らかにする。

2. 振り仮名・振り片仮名・振り漢字

本文校訂に関わる書き込みの分析に入る前に、ソウル大本の特徴である表記や発音に関する書き込みを確認しておく。「ソウル大学校蔵『源氏物語』（貴 3201/60B）の書き込みについて」（注3）において、漢字に対する振り片仮名の全用例 131 例のうち「御」に対する振り仮名が 62 例を占めることを指摘したが、今回は視点を変え「御」の全用例中、何箇所にも振り仮名があるか、また何種類の振り仮名があるかを調べた。以下に表と本文（注4）を示す。

〈表1〉 ソウル大本須磨巻の「御」

ミ	ゴ	ヲ	ン	お	合計
55	3	3	1	1	63例(191例)



〈図1〉 「御」の振り仮名・片仮名

須磨巻に「御」は191例あり、うち63例に振り仮名が付されている。漢字の右側に片仮名で振り仮名が付された用例は131例である（注6）。すなわち、須磨巻における振り仮名総数のうち「御」に約半数が使用されたことになる。「御」の読みに対する意識が繊細であることの証である。しかし、視点を変えれば「御」191例中振り仮名があるのは1/3に満たないとも言える。では、どのような場合に振り仮名をつけたのか。具体的に確認していくと、31オ「御前」についているのは平仮名の「お」であり、振り平仮名は須磨巻で一例のみの特殊な用例となる。19オ5および19ウ7「御前」には「ヲ」とある。6オ4「御まへ」は「ヲ前」という振り片仮名および振り漢字が用いられている。振り漢字が見られる箇所もこの一例のみであり、「御前」「御まへ」に対する読みにおいて「おまえ」「ごぜん」を区別しようとする強い意識がうかがえる。15ウ3「ン」はおそらく「おん」と読むことを表したのであろう。桐壺巻冒頭の「御時」をどう読んだか興味深いところだが、ソウル大本は桐壺巻が欠けているのが惜しまれる。

3. 漢字表記

次に、漢字使用率の高さを示す例を今回翻刻した範囲で具体例を示す。

〈表2〉ソウル大本 漢字表記の具体例

番号	位置	本文
1	23ウ9	其儘に
2	26オ2	聊にて
3	26ウ3	倂
4	28オ3	忝き
5	30ウ2	いひ置劔
6	34ウ5	逍遙[セウヨウ]
7	36オ8	恒におぼし出でつゝ
8	36ウ7	さいのミや聞食て
9	38オ1	柴と云物ふすぶる也氣[ケリ]
10	38オ8	つかいしけん劔
11	42ウ1	俄に
12	43オ8	心の向後[ユクエ]ハ
13	44オ3	朝朗[アサボラケ]
14	45ウ3	軟障[ゼンジャウ]
15	47オ8	龍王

漢字使用の量だけでなく質を見るために、特徴的な箇所を1から15の番号をつけて示した。具体的に確認していくと、まず1「そのまま」、2「いささか」、3「おもかげ」、4「かたじけな」、5「おきけん」、7「つね」、8「きこしめし」、10「けん」、11「にわか」、15「りうおう」などは通常仮名書きされることが多い箇所である。次いで、13「朝朗」など読み誤らないであろう漢字にも振り仮名をつける一方、8「きこしめして」など振り仮名がないと読み間違えたり、読みづらかったりするものについていない。9

「なりけり」はさすがに振り仮名を付している。また、漢語である「軟障」は日大本も漢字表記であるが、青表紙本の大島本・横山本・池田本・飯島本「せしやう」、肖柏本「せんしやう」、河内本別本は全本「せんさう」である。「釈迦牟尼仏」「陰陽師」のように、漢語を漢字表記する諸本は多いが、「軟障」を漢字表記するのは珍しい。

4. 書き込みによる本文校訂

前稿において、ソウル大本は日大本の異本注記までそっくりそのまま書き写されており、違いは単純な写し誤りと見られるものばかりであることを指摘したが、本稿ではソウル大本が書き込みによって日大本とは異なる本文に変化した箇所を中心に考察し、校合に使われた本が何なのかを明らかにしたい。

本文校訂に関わる書き込みとして、異本注記・補入・見せ消ちの3つがある。まず異本注記から確認していく。異本注記箇所については、前稿の〈表6〉に示したように、ソウル大本の12箇所のうち11箇所が日大本とまったく同じであった。日大本になかった唯一の箇所が29オ「御こゝろ／＼みたまふに〔はイ〕」であり、「御心／＼みたまふは」とある諸本は河内本や別本ではなく、青表紙本の池田本・飯島本・肖柏本・横山本であった。横山本は「は」が補入、大島本は「み給ふ」である。つまり、校合に用いられた本文は青表紙本の池田本・飯島本・肖柏本・横山本のいずれか、またはいくつかということである。

次に、補入箇所は以下の〈表3〉のように全46例ある。

〈表3 ソウル大本補入箇所〉

位置	本文	日大本との一致	位置	本文	日大本との一致
1 1オ1	世[補入の]間	-	24 21ウ6	ずんじ給へる[補入さま]さる	○
2 4オ9	み給[補入へ]れバ	-	25 21ウ9	山[補入の]ハ	×
3 4ウ8	あたるべき[補入に]こそ	○	26 23ウ2	やうにて[補入中なるに]つれ／＼	○
4 5オ2	さきに[補入此]世を	×	27 24オ9	旅の[補入御]とのみ	×
5 5オ9	し侍[補入る]よなら	×	28 28オ9	泪おとし[補入をり]けり	○
6 5ウ4	とゞまり給[補入ひ]て	×	29 28ウ8	侍そ[ミセケチな]ど[補入ぞ]有ける	○
7 6オ1	ざま[補入に]思ひ	○	30 29ウ4	おぼしな[補入をイ]せり	○
8 6オ2	三位[補入の]中將	×	31 31オ7	枕[補入ハ]うく	×
9 6オ9	いで給[補入ふ]に	×	32 32ウ7	佛[ブツ][補入の]弟子[デシ]	×
10 6ウ1	いと[補入おもイ]しろきに	○	33 33オ2	梶[補入の]音に	○
11 7ウ6	いぎ[補入た]なき	○	34 35オ5	過侍[補入る]かたじけなく	×
12 8ウ5	とぶらひ[補入に]まいる	×	35 36ウ9	世[補入の]中	×
13 9ウ1	おほかりける[補入を]	○	36 37オ4	姫君 [°] [補入ハ]程	○
14 9ウ7	をろかに[補入て]もとより	○	37 39ウ5	年月をへ[補入に]ける	×
15 11ウ4	御[ミ][補入あり]さま	○	38 40ウ9	給へ[補入り]し	○
16 12オ7	にしおもて[補入に]ハ	×	39 41ウ7	打[補入おり]おほかり	○
17 15ウ9	も中／＼[補入今]一きハ	○	40 41ウ7	廿よ[ミセケチ]日[補入あまり]いに	○
18 16オ7	かきあつ[補入め]	○	41 42オ2	ず[補入ん]じ給ひ	×
19 17オ1	つかうまつ[補入れ]りし	×	42 42オ7	時[補入世]のおぼえ	○
20 18オ2	木立 [°] [補入木]ぶかく	○	43 43オ5	あま共 [°] [補入の]あさりして	×
21 18オ7	帰給[補入ひ]て	×	44 43ウ2	いね[補入ども]取出て	×
22 19ウ1	宮[補入ノ]内	○	45 45ウ6	見給ふに[補入も]よそへられて	○
23 19ウ2	み奉[補入れる]	○	46 46オ6	ひぢ[補入が]不濁点 [°] さ雨	○

「日大本との一致」欄は補入した結果日大本と一致したものを「○」、一致しなかったものを「×」とした。「－」はソウル大本の独自異文である。「×」となったものは、全用例がもとは日大本の本文であった。つまり、補入箇所全 46 例（異本注記 2 例を含む）のうち、補入した結果日大本の本文になったもの 19 例、日大本と同じ本文だったものを校合して校訂したものが 25 例となる。このことから書写時点での修正箇所が 19 箇所あり、その後他の本と校合し書き込んだのが 25 箇所あったと考えられる。この校訂された本文が何本に拠るものかを調べたものが、次の〈表 4〉である。

〈表 4〉補入後の本文

	位置	本文	補入後の本文	同じ写本
1	5才2	さきに[補入此]世を	さきに此世を	なし
2	5才9	し侍[補入る]よなら	し侍るよなら	【青】横
3	5ウ4	とゞまり給[補入ひ]て	とゞまり給ひて	なし
4	6才2	三位[補入の]中将	三位の中将	なし
5	6才9	いで給[補入ふ]に	いで給ふに	なし
6	8ウ5	とぶらひ[補入に]まいる	とぶらひにまいる	なし
7	12才7	にしおもて[補入に]ハ	にしおもてには	【青】横肖
8	17才1	つかうまつ[補入れ]りし	つまうまつれりし	なし
9	18才7	帰給[補入ひ]て	帰給ひて	【青】全本
10	21ウ9	山[補入の]ハ	山のは	なし
11	24才9	旅の[補入御]とのゐ	旅の御とのゐ	【青】大横池飯肖
12	31才7	枕[補入ハ]うく	枕は	なし
13	32ウ7	佛[ブツ][補入の]弟子[デシ]	佛の弟子	【青】肖
14	35才5	過侍[補入る]かたじけなく	過侍る	【青】肖
15	36ウ9	世[補入の]中	世の中	なし
16	39ウ5	年月をへ[補入に]ける	年月をへにける	なし
17	42才2	ず[補入ん]じ給ひ	ずんじ給ひ	【青】肖
18	43才5	あま共〔補入の〕あさりして	あま共のあさりして	なし
19	43ウ2	いね[補入ども]取出て	いねども取出て	【青】横

文意に変更を加えるようなものはなく、別本や河内本の本文と対照した形跡もない。多くが漢字の送り仮名や「の」の読み添えといったものに限られている。同じ本文の写本が見つからないことから、読解していく過程で独自に書き込んだ可能性も考えられる。補入後の校訂本文は横山本と肖柏本が主である。肖柏本 6 箇所、横山本 5 箇所であり、肖柏本とのみ一致する箇所は 3 箇所と多い。

最後に、見せ消ちによる校訂をした箇所を検討する。見せ消ちは 79 箇所あるが、連続した箇所を一つとしてまとめて計算すると、67 箇所となる。それを示したものが、次頁の〈表 5〉である。もと日大本であった箇所が 34 箇所、校訂後日大本と同じとなった箇所が 30 箇所、校訂前も後も日大本とは異なる箇所が 3 箇所となる。

〈表5〉 日大本と同じ本文を見せ消ちで校訂した箇所

	位置	ソウル大本	もと日大本	校訂後日大本	その他
1	1ウ5	二日[ミセケチ]三日			○
2	2オ8	哀け[ミセケチ]		○	
3	3オ7	う[ミセケチ]ち[ミセケチ]やつれたるにて	○		
4	4オ6	見給ふ[ミセケチ]る[ミセケチ]に	○		
5	4ウ1	聞え給ひ[ミセケチ]て	○		
6	5オ4	御[ミ]心バへな[ミセケチ]と[ミセケチ]	○		
7	5ウ2	思ひ[ミセケチ]給へなぐさめ侍る	○		
8	5ウ5	思ひ[ミセケチ]ふ[ミセケチ]るを		○	
9	6オ1	思ひ[ミセケチ]給へ	○		
10	6オ1	よらん方なくな[ミセケチ]ん[ミセケチ]など	○		
11	6オ3	人に[ミセケチ]人 ^ゝ		○	
12	6オ5	こよなう忍ひ[ミセケチ]おぼす	○		
13	6オ8	夜ふかう[ミセケチ]く	○		
14	7オ8	うちずんじ給[ミセケチ]て	○		
15	9オ3	すがた共 ^ゝ お[ミセケチ]		○	
16	9ウ9	御弔[トフラ]ひにた[ミセケチ]に[ミセケチ]	○		
17	10オ9	いとつきなかるべきも[ミセケチ]也		○	
18	12オ3	かくさ[ミセケチ]れて		○	
19	13オ8	くらす物なれな[ミセケチ]とのたまひて	○		
20	13ウ8	もてなし給[ミセケチ]	○		
21	14ウ9	思ふ給ふ[ミセケチ]る[ミセケチ]を[ミセケチ][へ出る]のみ		○	
22	16オ2	思ふ[ミセケチ]ひ[給へ[ミセケチ]あはすることの	○		
23	16ウ9	御[ミセケチ]み[そぎのひかり		○	
24	17オ9	おがみ給と[ミセケチ]て[ミセケチ]	○		
25	20ウ7	いミじく[ミセケチ]うおかしげにて		○	
26	22オ8	おりならす[ミセケチ]はイハ	○		
27	22ウ2	事共 ^ゝ な[ミセケチ]ど[ミセケチ]よしきよの朝臣	○		
28	22ウ6	忍ひ[ミセケチ]て	○		
29	22ウ9	年月をすく[ミセケチ]ごさまし	○		
30	23オ4	ミ[ミセケチ]御事		○	
31	23オ5	はじめて[ミセケチ]		○	
32	24オ1	人々 ^ゝ も[ミセケチ]	○		
33	24ウ4	出入給ひ[ミセケチ]しかたより		○	
34	24ウ8	恋しう思ひ[ミセケチ]聞え給へる	○		
35	26オ1	共ハえなん[ミセケチ]どばかり	○		
36	26オ4	打なげ[ミセケチ]かれ給ぬ		○	
37	26オ5	こまや[ミセケチ]かなりし御返り		○	
38	26オ9	思ふ[ミセケチ]さ ま	○		
39	26ウ4	たへがたう[ミセケチ]思ひ[ミセケチ]出られ給へば	○		
40	27オ6	思ひ[ミセケチ]給へられぬ	○		
41	27オ9	思ひ[ミセケチ]やり聞えさするにも	○		
42	27ウ4	世の有様も猶[ミセケチ]いかに	○		
43	27ウ9	哀に思ひ[ミセケチ]聞え	○		
44	28オ8	いみじうて[ミセケチ]めでたし		○	
45	28ウ8	つきせぬ心ちし侍そ[ミセケチ]な[ど[補入ぞ]有ける		○	
46	29オ7	聞え[ミセケチ]給へば		○	
47	29オ7	恋[ミセケチ]京のけいし		○	
48	30オ1	思ひ[ミセケチ]出る事	○		
49	30ウ1	思ひ[ミセケチ]おとされんこそ	○		
50	32オ5	磯のたゝずまひ又[ミセケチ]に[なく			○
51	33オ9	空[ミセケチ]雲のよそにも		○	
52	34オ2	のたまひ[ミセケチ]ハせし程	○		
53	35オ4	思ひ[ミセケチ]の外に	○		
54	36オ9	泣給ふ[ミセケチ]を		○	
55	37ウ8	いと近う[ミセケチ]く	○		
56	40オ1	はゝあなかたハ[ミセケチ]わや		○	
57	40オ2	いとおほくもち[ミセケチ]給て	○		
58	40ウ2	に[ミセケチ]さて[も心とゝめ給ふ		○	
59	41ウ7	二月[ギサラギ]廿日[ミセケチ]日[補入あまり]		○	
60	42オ6	いとき[ミセケチ]よけれバ		○	
61	42ウ3	からめいたる[ミセケチ]り所の		○	
62	42ウ5	をろそかなる物な[ミセケチ]から		○	
63	42ウ9	かりそめにしな[ミセケチ]て			○
64	44オ2	はる[わつイ]かなる[ミセケチ]		○	
65	44オ3	おしむべか[ミセケチ]かんめり	○		
66	46ウ6	はらめきおつお[ミセケチ]かくて		○	
67	47オ9	むつま[ミセケチ]かしう		○	

校訂した後の本文が他の写本にあるかを示したのが〈表 6〉である。傾向を明確にするため、「思ふ」「給ふ」の「ふ」の送り仮名の有無や読み添えの「の」といったものを省略して示した。また、校訂前も後も日大本と異なる用例は前稿で触れたので省く。

〈表 6〉 改訂後の本文

	位置	改定本文	同じ写本
1	3才7	やつれ	【別】
2	5才4	御心ばへ	ナシ
3	6才1	よらん方なくなど	【青】横
4	6才8	夜ふかく	【青】肖
5	7才8	うちずんじて	ナシ
6	9ウ9	御弔ひに	ナシ
7	13才8	くらす者なれと	ナシ
8	13ウ8	もてなし	ナシ
9	16才2	思ひ給あはすることの	【青】肖(思給あはする)
10	22ウ2	事共`よしきよの朝臣	ナシ
11	22ウ9	年月をすごさまし	【青】横
12	24才1	人々`	【別】陽
13	26才1	共ハえなどばかり	ナシ
14	26ウ4	たへがた思出られ	ナシ
15	27ウ4	世の有様もいかに	【別】陽(よのありさまを)
16	34才2	のたまはせし程	【青】大横池飯肖
17	37ウ8	いと近く	【青】大横池飯肖【河】平以外【別】
18	40才2	いとおほくも給て	ナシ
19	44才3	おしむべかんめり	【青】横肖

校訂後に同じ写本はない場合が多く、実際に見比べたのか、書き込みを行なった者の判断によるものなのかは即断できないが、今までの分析と矛盾しない傾向が出ている。すなわち、異本注記の書き込みから校合に使われたのは、青表紙本の池田本・飯島本・肖柏本・横山本のいずれかとしていたが、今回の分析から横山本と肖柏本に絞られる。具体的には、青表紙本の横山本とだけ共通箇所が2つ、肖柏本とのみ共通する箇所が2つあり、19箇所のうち、5箇所共通が横山本、4箇所共通が肖柏本である。つまり、日大本を一通り書写した後に、横山本・肖柏本と校合し、書き込みを加え本文校訂を行なったと推察される。

以上の結果をまとめると、本文校訂に関わる異本注記箇所・補入・見せ消ちといった作業を経て横山本と肖柏本と混成された本文へと変化したということである。ただし、肖柏本と横山本とを同時に対照したのか、それぞれ1本ずつ比べていったのか、その際の順序の先後関係も含めて不明である。

5. まとめ

一連の分析から、ソウル大本の独自異文は9箇所、大島本との異同は197箇所、日大本

との異同は 58 箇所であることが判明した。また、補入や見せ消ちといった校訂の結果、横山本・肖柏本の本文を採用した箇所が多く確認できた。

前稿を踏まえてまとめると、ソウル大本はまず日大本を異文注記も含めて一通り書き写されたものである。漢字を積極的に当てている点に特徴があり、漢字使用率は 19. 1%に及ぶ。その後、書き込み時期は不明だが、横山本や肖柏本を参照し本文校訂が行なわれた。ソウル大本の写本としての位相は以上の通りだが、ソウル大本の特徴は何より書き込みの多さにある。その書き込みは先人の学習の有り様を伝えるものであり、『源氏物語』が現在まで読まれ続けてきた過程を知る材料となる。今回検討してきた校訂に関する書き込みも学習の跡と言える。ただし、その学習過程において解釈にかかわる書き込みがないことは注目に値する。「御」の読み分けのように、書き込みの多くは音読を想定した学習の跡であり、解釈や典拠に関する指摘は見られないのである。『白氏文集』をはじめ、漢籍や史書、仏典など多様な典拠が挙げられる須磨巻においてさえ、指摘がないのである。他の巻についてもおそらく同様と思われるが、詳細は他日を期したい。

ソウル大本は書写される際に漢字を多く用いて語句理解や文脈理解を容易にしたと言えるが、これだけある書き込みの中に、主語の明示や引歌の指摘、古注釈書の見解などはまったく見られない。書き込みは本文校訂に関わるものおよび濁点や振り仮名など発音に関するものばかりであり、本文を声に出して読むときの正確さが何よりも重視されたことがわかる。こうした音読に重きをおく読解のあり方をうかがいしることができ、読解の水準あるいは学習の力点がわかるという意味でソウル大本は学習本としての価値があり、源氏物語の享受の一端をうかがえる貴重な資料と言える。

6. 翻刻

【凡例】

行移り・丁移り

- 1 本文の行移りは原本にしたがった。
- 2 丁移りは、丁数・表裏を算用数字とオウの形で括弧書きで示した。

文字

- 1 仮名は現行の平仮名を用いた。
- 2 漢字は現行の字体によることを原則とした。
- 3 語を漢字表記にする場合の漢字と、仮名表記にする場合の字母とが、一致するときには、漢字として扱った。 (例) 見くるし、 気しき
- 4 繰り返し符号は次のように統一した。
 - 仮名一文字の繰り返し (例) こゝち
 - 漢字一文字の繰り返し (例) 人々
 - ただし、本が「／＼」の場合はそのままにした。
 - 複数文字の繰り返し (例) ひと／＼

和歌

- 1 和歌は二字下げとした。

傍記等

- 1 傍記は[]で「ミセケチ」、「補入」、「不濁点」を示した。
- 2 ルビは平仮名、片仮名、漢字、それぞれの字体で[]で示した。
- 3 異本注記は[イ]で示した。

(22 オ)

- 3 おハすべき所ハ行平の中納
- 4 言のもしほたれつゝ侘ける家居ちかきわたり也
- 5 けり海づらハやゝ入て哀に心すこげなる山中也
- 6 垣のさまより始めてめづらかに見給ふかや屋共芦ふ
- 7 ける廊[ラウ]めく屋などおかしくしつらひなしたり所に
- 8 付たる御住みやうかハりてかゝる[らぬイ]おりならす[ミセケチはイ]ハおか
- 9 しうも有なましと昔の御[ミ]心のすさひ[ミ]おぼし

(22 ウ)

- 1 いづちかき所／＼の御[ミ]荘[サウ]のつかさめしてさるべき
- 2 事共ゝな[ミセケチ]ど[ミセケチ]よしきよの朝臣したしきけいしに
- 3 ておほせおこなふも哀也時の間にいと見所ゝ有て
- 4 しなさせ給水ふかうやりなしうへ木共ゝなどして
- 5 今ハとしづまり給心ちうつゝならず国のかミも
- 6 したしきとの人ゝなれハ忍ひ[ミセケチ]て心よせつかうまつる
- 7 かゝる旅所ゝともなく人さハがしけれ共ゝはか／＼しう
- 8 物をものたまひあハすべき人しなければ知[シラ]ぬ国
- 9 の心ちしていとむもれいたくいかで年月をすく[ミセケチご]

(23 オ)

- 1 さましとおぼしやらるやう／＼事しづまり行に
- 2 なが雨の比に成て京の事共ゝおぼしやらるゝに恋
- 3 しき人おほく女君ゝのおぼしたりしさま東宮の
- 4 ミ[ミセケチ御]事わか君ゝのなに心もなくまぎれ給ひしなどを
- 5 はじめて[ミセケチ]爰かしこ思ひやり聞え給京へ人いだし
- 6 立給二条院へ奉給と入道の宮のとハかきもやり
- 7 たまはずくらされ給へり宮にハ
- 8 松嶋のあまの苦屋もいかならんすまのうら
- 9 人ゝ塩たるゝ比いつと侍らぬ中にもきしかた行

(23 ウ)

- 1 さきかきくらし汀[ミギハ]まさりてなん内侍のかみの御本
- 2 に例の中納言君のわたくし事ゝのやうにて[補入中なるに]つれ／＼
- 3 と過にしかたの思ひ給へ出らるゝに付ても
- 4 こりずまのうらのみるめもゆかしきを塩焼あ
- 5 まやいかゝゝおもはんさま／＼かき尽し給ふ言の
- 6 は思ひやるべし大殿にも宰相のめのとにもつ
- 7 かうまつるべき事など書つかはす京にハ此御文
- 8 所々ゝに見給つゝ御[ミ]心乱給人／＼のミおほかり二条
- 9 院の君ハ其俣に起もあがり給はずつきせぬさま

(24 オ)

- 1 におぼしこがるればさふらふ人々ゝも[ミセケチ]こしらへわび
- 2 つゝ心ぼそく思ひあへりもてならし給し御でう
- 3 ど共ゝ引ならし給ひし御ことぬぎすて給へる御ぞ
- 4 の匂ひなどにつけても今ハと世になからん人の
- 5 やうにのミおぼしたればかつハゆゝしくて少納言ハ
- 6 そうづに御いのりの事などきこゆ二かたに御[ミ]
- 7 すほうなどせさせ給かつハかくおぼしなげく御[ミ]
- 8 心しづめ給ておもひなき世にあらせ奉り給
- 9 へと心ぐるしきまゝにいのり申給旅の[補入御]とのみ

(24 ウ)

- 1 物などでうして奉給かとり御なをしさしぬき
- 2 さまかはりたる心ちするもいミじきにさらぬ鏡
- 3 との給し御佛のげに身にそひ給へるもかひなし
- 4 出入給ひ[ミセケチ]しかたよりゐ給ひし真木柱ゝなどを
- 5 ミ給にもむねのミふたがりて物をとかう思ひめ
- 6 ぐらし世に塩じミぬるよハひの人だにありまし
- 7 てなれむつび聞え父母にも成ておほ[ヲ]したて
- 8 ならハし給へれば恋しう思ひ[ミセケチ]聞え給へることハリ
- 9 也ひたすら世になく成なんハいハん方なくてやう／＼

(25 オ)

- 1 忘草ゝもおひやすらんきく程はちかけれどいつ
- 2 までと限ある御別にもあらでおぼすにつきせず
- 3 なん入道の宮にも春宮の御事によりおぼし
- 4 なげくさまいとさら也御[ミ]すくせの程をおぼすに
- 5 ハいかゝゝあさくハおぼされん年比ゝハたゝゝ物の聞え
- 6 などのつゝましきにすこし情あるけ色ミセバ

- 7 それにつけて人のとがめ出る事もこそとのミひと
- 8 へにおぼし忍びつゝ哀をもおほう御[ゴ]らんじす
- 9 ごしすくずくしうもてなし給ひしをかばかり

(25 ウ)

- 1 に浮世の人ごとなれどかけてもこのかたにハいひ出る
- 2 事なくてやみぬる斗の人の御[ミ]心むけもあながち
- 3 なりし心の引かたにまかせずかつハめやすく
- 4 もてかくしつるぞかしと哀に恋しうもいかゞ
- 5 おほし出ざらん御かへりもすこしこまやかにて
- 6 このごろハいとゞ
- 7 塩たるゝことをやくにて松嶋に年ふるあ
- 8 まもなげきをぞつむかんの君の御かへりにハ
- 9 浦にたくあまだにつゝむ恋なればくゆる

(26 オ)

- 1 煙よ行かたぞなきさらなる事共ハえなん[ミセケチ]どばかり
- 2 聊にて中納言の君のなかにありおぼしなげく
- 3 さまなどいミじくいひたり哀と思ひ聞え給ふ
- 4 し／＼もあれバ打なげ[ミセケチ]かれ給ぬ姫君の御文ハ
- 5 心ことにこまや[ミセケチ]かなりし御返りなれば哀なる
- 6 事おほくて
- 7 うら人ゝの塩くむ袖にくらべミよ浪路へだ
- 8 つるよるの衣を物の色したまへるさまなどいと
- 9 きよら也何事もらう／＼じう物し給を思ふ[ミセケチ]さ

(26 ウ)

- 1 まにて今ハこと／＼[不濁点]に心あはたゝしう行かゝづらふ
- 2 かたもなくしめやかにて有べき物をとおぼすに
- 3 いミじう口おしうよるひる俤におぼえてたへが
- 4 たう[ミセケチ]思ひ[ミセケチ]出られ給へば猶忍びてやむかへましと
- 5 おぼす又打かへしなぞやかくうき世につミをだ
- 6 にうしなはんとおぼせバやがて御さうじんにて明
- 7 暮おこなひておハす大殿のわか君ゝの御事など
- 8 有にもいとかなしけれどをのづからあひミてん
- 9 たのもしき人々ゝものし給へばうしろめたうハ

(27 オ)

- 1 あらずとおぼしなさるゝは中／＼此道のまどハれぬに
- 2 やあらん誠やさハがしかりし程のまぎれにもら

3 してげりかの伊勢の宮へも御つかひ有けりかれ
 4 よりもふりハへたづねまいれりあさからぬ事共^ゞ
 5 書給へりことのは筆づかひなどハ人よりことにな
 6 まめかしういたりふかくみえたり猶うつゝとは思ひ[ミセケチ]
 7 給へられぬ御住みをうけたまはるも明ぬ夜の心
 8 まどひかとなんさりとも年月ハへたまハじ
 9 と思ひ[ミセケチ]やり聞えさするにも罪深き身のみ
 (27 ウ)

1 こそ又聞えさせん事も遥なるべければ
 2 うきめかるいせおのあまを思ひやれもしほ
 3 たるてふすまのうらにてよろづにおもひ給へミ
 4 だるゝ世の有様も猶[ミセケチ]いかに成はつべきにかとおほ
 5 かり
 6 いせじまや塩干のかたにあさりてもいふかひ
 7 なきハわが身也けり物を哀とおぼしける儘に
 8 打をき／＼書給へる白きからの紙四五枚ばかりを
 9 巻つゝ^ゞ けて墨付^ゞ など見所^ゞ あり哀に思ひ[ミセケチ]聞え
 (28 オ)

1 し人を一ふしうしと思ひ聞えし心あやまりにかのミ
 2 やす所^ゞ もおもひうんじて別給にしとおぼせバ今に
 3 いとおしう忝き物に思聞え給折柄[フリカラ]の御文いと哀
 4 なれバ御つかひさへむつましうて二三日すへさせ給
 5 てかしこの物語などせさせてきこしめすわかやかに
 6 けしきあるさふらひの人なりけりかく哀なる御
 7 住居なれバかやうの人もをのづから物遠からでは
 8 のミ奉る御さまかたちをいみじうて[ミセケチ]めでたしと泪おと
 9 し[補入をり]けり御返かき給言の葉おもひやるべしかく
 (28 ウ)

1 世をはなるべき身とおもふ給へましかバおなじくは
 2 したひ聞えまし物をなどなんつれ／＼^ゞ ところろ
 3 ぼそきまゝに
 4 伊勢人^ゞ のなみのうへこぐをぶねにもうき
 5 めはからでのらまし物を
 6 あまがつむなげきの中にしほたれていつまで
 7 すまのうらにながめむ聞えさせん事のいつとも
 8 待らぬこそつきせぬ心ちし侍そ[ミセケチな]ど[補入ぞ]有けるかやうに

9 いづこにもおぼつかならず聞えかハし給花ちる

(29 オ)

- 1 里もかなしとおぼしけるまゝにかきあつめ給へる
- 2 御心／＼ み給ふに[ハイ]おかしきも目馴ぬ心ちしていづ
- 3 れも打見つゝなぐさめ給へど物思ひの催[モヨホ]しぐさなめり
- 4 荒まさる軒の忍ぶを詠つゝしげくも露
- 5 のかゝる袖哉と有をげに葎[ムグラ]より外のうしろミも
- 6 なき様にておハすらんおぼしやりて長雨につ
- 7 いち所々ゝくづれてなど聞え[ミセケチ]給へば恋[ミセケチ京]のけいしの
- 8 本に仰せつかハして近き国々ゝの御[ミ]荘[サウ]の物なども
- 9 よほさせてつかうまつるべきよしのたまハすかむの

(29 ウ)

- 1 君ハ人わらへにいみじうおぼしくづおるゝをおとゝゝいと
- 2 かなしうし給君にてせちに宮にも内にもそうし
- 3 給けれバ限[カギリ]有女御御[ミ]息[ン]所にもおハせず大やけざ
- 4 まの宮づかへとおぼしな[補入をイ]せり又かのにくかりし故こそ
- 5 いかめしき事も出こしか[不濁点]ゆるされ給て参給ふべき
- 6 に付ても猶心にしミにし方ぞ哀におぼえ給ける
- 7 七月[フツ[不濁点]キ]に成て参給いミじかりし御おもひの名残な
- 8 れバ人のそしりもしろしめされず例のうへにつ
- 9 とさふらハせ給て萬に恨かつハ哀にちぎらせ給

(30 オ)

- 1 御様形もいとなまめかしう清らなれと思ひ[ミセケチ]出る事
- 2 のミおほかる心の内ぞ忝き御[ミ]遊[アソビ]のついでに其人
- 3 のなきこそいとさう／＼ しけれいかにましてさ思ふ
- 4 人おほからん何事も光なき心ちするかなとの給ハ
- 5 せて院のおぼしのたまハせし御[ミ]心をたがへつる哉
- 6 つミうらんかしとて泪ぐませ給にえねんじ給
- 7 ハず世中こそあるに付てもあぢきなき物也
- 8 けれとおもひ知まゝに久しく世にあらん物となん
- 9 さらに思ハぬさもなりなんにいかゝゝ おぼさるべきちかき

(30 ウ)

- 1 ほどの別に思ひ[ミセケチ]おとされんこそねたけれいける世にと
- 2 ハげによからぬ人のいひ置劔といとなつかしき御さまに
- 3 て物を誠に哀とおぼし入ての給ハするに付て
- 4 ほろ／＼とこぼれいづれハさりやいづれにおつるに

- 5 かとのたまハす今までみこたちのなきこそさう
 - 6 〱 しけれ春宮を院のの給ハせしさまに思へ
 - 7 どよからぬ事共出くめれば心ぐるしうなど世
 - 8 を御[ミ]心の外にまつりごちなし給人のあるに
 - 9 わかき御[ミ]心のつよき所なき程にていとおしとおぼ
- (31 オ)

- 1 したる事もおほかり□すまにハいとゝ 心づくしの秋風
 - 2 に海ハすこし遠けれど行平中納言の関吹こゆると
 - 3 云けむうら浪よる〱ハげにいとちかく聞えて又なく哀
 - 4 なる物ハかゝる所の秋也けり御[お]前にいと人ずくなにて
 - 5 打やすみわたれるに独めを覚して枕をそばたてゝ
 - 6 四方の嵐を聞給に浪たゝ 爰元に立くる心ちして
 - 7 泪おつ共覚えぬに枕[補入ハ]うく計ゝに成にけり琴をす
 - 8 こしかきならし給へるがわれながらいとすごう
 - 9 きこゆれば引さしたまひて
- (31 ウ)

- 1 恋侘て泣ねにまがふうら浪は思ふかたより
 - 2 かぜや吹らんとうたひ給へるに人ゝ おどろきてめでたう
 - 3 おぼゆるに忍ばれであいなふ起みつゝはなを忍び
 - 4 やかにかみわたす□げにいかに思ふらんわが身ひとつに
 - 5 よりおやはらから片時[カタトキ]立はなれがたく程に付
 - 6 つゝ思ふらん家を別てかくまどひあへるとおぼす
 - 7 にいミじくていとかく思ひしづむさまを心ぼそしと
 - 8 思ふらんとおぼせバひるはなにくれとたハふれごと打
 - 9 の給ひまぎらハしつれ〱なるまゝに色ゝのかみ
- (32 オ)

- 1 をつぎつゝ手習をし給ひめづらしきさまなるから
 - 2 のあやなどにさま〱のゑどもをかきすさび[ミ]給へる屏
 - 3 風の面共ゝなどいとめでたくみ所ゝあり人々ゝのかたり聞
 - 4 えし海山の有様を遥におぼしやりしを御めに
 - 5 ちかくてハげに及ハぬ磯のたゝずまひ又[ミセケチに]なくかき集
 - 6 め給へり此比ゝの上手にすめる千枝つねのりなどを
 - 7 めしてつくりゑつかうまつらせバやと心もとながり
 - 8 あへりなつかしうめでたき御様に世の物おもひ忘れ
 - 9 てちかう馴つかうまつるを嬉しき事にて四五
- (32 ウ)

- 1 人ばかりぞつとさふらひける前栽[センザイ]の花色ゝ咲乱
- 2 面白き夕暮に海見やらるゝ廊に出給てたゝ
- 3 ずミ給御さまのゆゝしくきよなる事所からハ
- 4 まして此世の物共みえ給はず白きあやのなよゝか
- 5 なるしをん色など奉りてこまやかなる御なをし
- 6 帯しどけなく打乱れ給へる御様にて釈迦牟尼[シャカムニ]
- 7 佛[ブツ][補入の]弟子[デシ]と名乗てゆるゝかによミ給へるまだよに
- 8 しらず聞ゆ奥より舟共^ゝのうたひのゝしりて漕行
- 9 なども聞ゆほのかにたゝ^ゝちいさき鳥のうかべ[メ]ると見や

(33 オ)

- 1 らるゝも心ぼそげなるに鴈のつらねて鳴聲
- 2 梶[補入の]音にまがへるを打詠給て泪のこぼるゝをかき
- 3 払[ハライ]給へる御手つきくろき御ずゝ^ゝにはへあへるハ古里
- 4 の女恋しき人々^ゝの心ミななぐさミにけり
- 5 初鴈は恋しきひとのつらなれやたびの空
- 6 飛声のかなしきとの給へバよし清
- 7 かきつらねむかしの事ぞおもほゆる鴈ハ其世の友
- 8 ならねども民部大輔
- 9 心から常世[トコヨ]をすててなくかりを空[ミセケチ雲]のよそにも

(33 ウ)

- 1 思ひけるかな前[サキノ]右近のぜう
- 2 常世出て旅の空なる鴈がねもつらにをくれぬ
- 3 程ぞなぐさむ友まどハしてはいかに侍らましといふおや
- 4 のひたちに成てくだりしにもさそハれでまいれる也
- 5 けりしたにハ思ひくだくべかめれどほこりかにもて
- 6 なしてつれなき様にしありく月のいと花やかに
- 7 さし出たるにこよひハ十五夜也けりとおぼし出て
- 8 殿上の御あそび恋しく所々^ゝながめ給ふらんかしと思ひ
- 9 やり給につけても月のかほのミまもられ[レ]給二千里

(34 オ)

- 1 外故人の心とずんじ給へるれいの泪もとゝ^ゝめられ
- 2 ず入道の宮の霧やへだつるとのたまひ[ミセケチハセ]し程いはん
- 3 かたなく恋しう折／＼の事思ひ出給によゝとなか
- 4 れ給夜更侍ぬと聞ゆれど猶入給はず
- 5 みる程ぞしバしなぐさむめぐりあはん月の都ハ
- 6 遙かなれ共其夜うへのいとなつかしう昔物語など

- 7 し給し御様の院に似奉り給へりしも恋しう思ひ
- 8 出聞え給て恩賜[ランシ]の御衣ハ今爰に有[リ]とずんじ
- 9 つゝ入給ぬ御ぞハ誠に身はなたずかたはらに置給

(34 ウ)

- 1 へり
- 2 うしとのミひとへに物ハおもほえで左右[ヒタリミギ]にもぬるゝ
- 3 袖哉其比大弐ハ登けるいかめしうるいひろくむすめ
- 4 がちにて所せかりければ北の方ハ舟にてのぼる浦
- 5 づたひに逍遙[セウヨウ]しつゝくるに外よりも面白きわたり
- 6 なれば心とまるに大将かくておハすときけバあい
- 7 なくすいたるわかき娘達ハ舟の内さへはづかしう心
- 8 げさうせらるまして五節の君ハつなて引すぐるも
- 9 口惜きに琴のこゑ風に付て遙に聞ゆるに所の

(35 オ)

- 1 さま人の御程物のねの心ぼそさ取あつめ心有限皆
- 2 泣にけり帥[ソチ]御せうそこ聞えたりいと遥なる程より
- 3 まかり登りてハマづいつしかさふらひて都の御[ミ]物
- 4 語もとこそおもひ給へ侍りつれ思ひ[ミセケチ]の外にかくて
- 5 おハしましける御宿をまかり過侍[補入る]かたじけなく
- 6 かなしうも侍る哉あひしりて侍る人々ゝさるべき是
- 7 かれまできむかひてあまた侍れば所せさを思ひ
- 8 給へはゝかり侍る事共侍てえさふらハぬ殊更に参
- 9 侍らんなど聞えたり子の筑前のかみぞまいれる此殿

(35 ウ)

- 1 のくら人[ド]になしかへりミ給ひし人なればいと悲し
- 2 いミじと思へ共又ミる人々ゝのあれバ聞えを思ひてしバし
- 3 もえ立とまらず都放れて後昔したしかりし
- 4 人々ゝあひみる事かたくのミ成にたるにかくわざと立
- 5 寄物したることゝの給御返しもさやうになんかみ
- 6 なく／＼かへりておハする御[ミ]有様かたるに帥よりは
- 7 じめむかへの人々まが／＼しうなきみちたり五節
- 8 はとかくして聞えたり
- 9 琴のねに引とめらるゝ綱手縄たゆたふ心君

(36 オ)

- 1 知[シル]らめやすき／＼しさも人などがめそと聞えたりほゝ
- 2 ゑみて見給いとはづかしげ也

3 心有てひきての綱のたゆたはゝゝ 打過ましや
 4 すまのうら浪いさりせんとハおもはざりしハやと有
 5 むまやのおさにくしとらする人もありけるをま
 6 しておちとまりぬべくなんおぼえける都に八月
 7 日過るまゝにみかどを初奉りて恋聞ゆるおりふ
 8 しおほかり春宮ハまして恒におぼし出つゝ 忍び
 9 て泣給ふ[ミセケチ]を見奉る御めのとまして命婦の君ハい
 (36 ウ)

1 ミじう哀に見奉る入道の宮ハ春宮の御事をゆゝ
 2 しうのミおぼしゝに大将もかくさすらへ給ぬるを
 3 いミじうおぼしなげかる御はらかなの御[ミ]子たちむつ
 4 ましう聞え給ひし上達部などはじめつかたはとふ
 5 らひ聞え給ふなどありきあハれなる文をつくりか
 6 ハしそれにつけても世中にのミめでられ給へばき
 7 さいのミや聞食ていミじくの給ひけり大やけのかう
 8 じなる人ハ心に任せて此世のあちハひをだに知
 9 事かたうこそあなれ面白き家ゐして世[補入の]中を
 (37 オ)

1 そしりもどきてかの鹿を馬といひけん人のひが
 2 めるやうについせうするなどあしき事共ゝを聞え
 3 ければわづらハしとてたえてせうそこ聞え給人
 4 なし二条院の姫君ゝ [補入ハ]程ふるまゝにおぼしなぐさむ
 5 折なしひんがしのたいにさふらひし人々ゝ もミなわたり
 6 参しはじめハなどかさしもあらんと思ひしかど見
 7 奉なるゝ程になつかしうおかしき御[ミ]有様まめやか
 8 なる御[ミ]心ばへも思ひやり深く哀なればまかでちるも
 9 なしなべてならぬきハの人ゝゝにハほのみえなどし
 (37 ウ)

1 給ふそこらの中にすぐれたる御[ミ]心ざしもことハリ也
 2 けりと見奉るかの御住居にハ久しうなるまゝに
 3 えねんじすごすまじうおぼえ給へど我が身だ
 4 にあさましきすくせとおぼゆる住みにていかでかハ
 5 打ぐしてハつきなからんさまを思ひかへし給所に
 6 つけて萬の事さまかハリ見給へしらぬしも人ゝの
 7 うへをも見給ひならぬ御[ミ]心ちにめざましうかたじ
 8 けなうミづからおぼさる煙のいと近う[ミセケチく]時々ゝ 立くる

9 を是やあまの塩やくならんとおぼしわたるハお

(38 オ)

1 ハしますうしろの山に柴と云物ふすぶる也氣[ケリ]め

2 づらかにて

3 山賤[ガツ]の庵りにたけるしバ／＼もこととひこなん

4 こふる里人ゝ冬に成て雪降[フリ]荒[アレ]たる比空のけしき

5 も殊にすごく眺給て琴を引すさひ[ミ]給て良清

6 に哥うたハせ大輔横[ヨコ]笛ゝふきてあそび給心とゝめ

7 て哀なる手など引給へるにこと物のこゑどもハや

8 めて泪をのごひあへり昔胡[コ]のくにゝつかハし劔

9 女をおぼしやりてましていかなりけん此世にわが

(38 ウ)

1 思ひ聞ゆる人などをさやうにはなちやりたらんこと

2 など思ふもあらんことのやうにゆゝしうて霜の後

3 の夢とずんじ給月いとあかうさし入てはかな

4 きたびのおまし所ゝハおくまでくまなし床の上に

5 夜ふかき空もミゆ入方ゝの月の影すごくミゆるにたゝ

6 是西に逝くなりと独ごち給て

7 いづかたの雲路に我もまよ[とイ]ひなん月のみる

8 らんこともはづかしと独ごちたまひてれいのまど

9 ろまれぬ暁の空にちどりと哀になく

(39 オ)

1 友千鳥もろこゑに鳴曉ハ独ね覚[ザメ]の床[トコ]もたの

2 もしまた起たる人もなればかへす／＼[不濁点]独ごちて

3 臥給へり夜ふかく御てうづまいりてねんずなど

4 し給もめづらしき事のやうにめでたくのミおぼえ給へバ

5 え見奉すてず家にあからさまにもえ出ざりけり

6 明石のうらハたゝハひわたる程なればよしきよの朝

7 臣かの入道のむすめを思ひ出て文などやりけれど

8 返事もせずちゝの入道ぞ聞ゆべき事なんあから

9 さまにたいめんもがなといひけれどうけひかざらん

(39 ウ)

1 物ゆへ行かゝりてむなしくかへらんうしろでもをこ

2 なるべしとくつしいたうていかずよにしらず心だ

3 かうおもへるに国のうちハかみのゆかりのみこそハかし

4 こき事にすめれどひがめる心ハさらにさもおもハで

5 年月をへ[補入に]けるに此君かくておハすと聞てはゝ

6 君ゝにかたらふやう桐つぼの更衣の御はらの源氏

7 の光君こそ大やけの御かしこまりにてすま

8 のうらに物し給なれあこの御[ミ]すくせにておぼえ

9 ぬ事の有也いかでかゝるつゐでに此君に奉らん

(40 オ)

1 といふはゝあなかつたハ[ミセケチわ]や京の人のかたるをきけ

2 バやんごとなき御めどもいとおほくもち[ミセケチ]給てそのあ

3 まり忍び／＼御[ミ]かどの御めをさへあやまち給て

4 かくもさバかれ給なる人ハマさにかくあやしき山

5 がつを心とゝゝめ給てんやといふはらだちてえしり

6 給ハじ思ふ心ことなりさる心をし給へついでして

7 爰にもおハしませんと心をやりにいふもかたく

8 なしく見ゆまバゆきまてしつらひかしづきけり

9 母君ゝなどかめでたくとも物のはじめにつみにあた

(40 ウ)

1 りてながされおハしたらん人をしも思ひかけん

2 に[ミセケチさて]も心とゝゝめ給ふべくハこそあらめたハふれにて

3 も有まじき事也といふをいといたくつぶやく

4 つみにあたる事ハもろこしにも我みかどにもかく

5 世にすぐれ何事にも人にことに成ぬる人

6 のかならず有事也いかに物し給君ぞこはゝ御

7 息所ハをのがおちに物し給し按察の大納言

8 の娘也いとかうざく成名を取て宮づかへにいだし

9 給へ[補入]しにこくわうすぐれて時めかし給事な

(41 オ)

1 らびなかりける程に人のそねミおほくて失[ウセ]給に

2 しかど此君の留り給へるいとめでたかく女ハ心

3 だかくつかうべきもの也をのれかゝるゐ中人ゝなり

4 とておぼしすてじなどいひゐたり此娘すぐれ

5 たる形ならねどなつかしうあてはかに心バせある

6 さまなどぞげにやんごとなき人におとるまじかり

7 ける身の有様を口惜き物に思ひ知てたかき人ハ

8 我を何の数にもおぼさじ程につけたる世をバ

9 さらにみじ命ながくて思ふ人々ゝにをくれなバ

(41 ウ)

- 1 尼にも成なん海の底にも入なんなどぞ思ひける
- 2 父君^ゝ 所せく思ひかしづきて年に二度すミよし
- 3 にまうでさせけり神の御しるしをぞ人しれ
- 4 ず頼ミ思ひけるすまには年かへりて日ながくつれ
- 5 づれなるに植しわか木の桜ほのかに咲初て
- 6 空のけしきうらゝかなるによろづの事おぼし
- 7 出られて打泣給ふ打[補入おり]おほかり二月[キサラギ]廿よ[ミセケチ]日[補入あ
まり]いに
- 8 し年京を別し時心ぐるしかりし人々^ゝ の御[ミ]有
- 9 様などいと恋しく南殿の桜ハ盛に成ぬらん

(42 オ)

- 1 一とせの花のえんに院の御[ミ]気色内のうへのいと
- 2 きよらになまめいて我つくれるくをず[補入ん]じ給ひ
- 3 しも思ひいできこえ給
- 4 ひとつとなく大ミや人^ゝ の恋しきに桜がざしゝ
- 5 けふも来にけりいとつれ／＼^ゝ なるに大殿の三位
- 6 中將ハ今ハ宰相に成て人がらのいとき[ミセケチ]よければ
- 7 時[補入世]のおぼえおもくてもものし給へど世中哀にあぢ
- 8 きなく物のおりごとに恋しくおぼえ給へバことの
- 9 聞え有てつミにあたる共[不濁点]いかゝ^ゝ ハせむとおぼしな

(42 ウ)

- 1 し[リイ]て俄にまうで給打みるよりめづらしく嬉し
- 2 さにもひとつ涙ぞこぼれけるすまゐ給へる様い
- 3 ハむかたなくからめいたる[ミセケチリ]所のさま絵にかきたらん
- 4 やうなるに竹あめる垣し渡して石のはし
- 5 松の柱をろそかなる物な[ミセケチ]からめづらかにおかし山が
- 6 つめきてゆるし色のきがちなるにあをにびの
- 7 かりぎぬさしぬき打やつれて殊更にゐ中
- 8 びもてなし給へるしもしミじう見るにえまれて
- 9 きよら也とりつかひ給へるでうどもかりそめにしな[ミセケチ]て

(43 オ)

- 1 おまし所^ゝ もあらハに見いれらるごすぐろくのはん
- 2 でうどたぎのぐなどゐ中わぎにしなして念[ネン]
- 3 誦[ズ]の具^ゝ おこなひつとめ給けりと見えたり物ま
- 4 入れるなど殊更所につけけう有てしなしたり
- 5 あま共^ゝ [補入の]あさりしてかいつ物もてまいれるをめし出て

- 6 御[ゴ]覽ず浦にとしふる様などとハせ給ふにさま／＼や
- 7 すげなき身のうれへを申そこハかとなくさへづるも
- 8 心の向後[ユクエ]ハ同じこと何かことなると哀に見給ふ
- 9 御ぞ共などかづけさせ給をいけるかひありと思へ

(43 ウ)

- 1 り御馬共ちかうたてゝみやりなるくらかなにぞな
- 2 るいね[補入ども]取出てかふなどめづらしう見給ふあす
- 3 かみすこしうたひて月比の御[ミ]物語泣ミわらひ
- 4 ミわか君の何ともよをおぼさで物し給かなしさ
- 5 をおとゝの明暮に付ておぼし歎くなど語給
- 6 にたへがたくおぼしたりつきすべくもあらねば中／＼
- 7 かたはしもえまねバス夜もすがらまどろます又
- 8 つくりあかし給さいひながらも物の聞えをつゝミてい
- 9 そぎかへり給ふいと中／＼也御かハラけ参てゑいの

(44 オ)

- 1 かなしミ泪そゝく春の盃[サカヅキ]のうちと諸声[モロコエ]にずん
- 2 じ給御供の人も泪をながすをのがじゝ[不濁点]はる[わつイ]かなる[ミセケチ]
- 3 る別をおしむべか[ミセケチかん]めり朝朗[アサボラケ]の空に鷹つれてわ
- 4 たるあるじの君
- 5 古里をいづれの春か行てみんうらやましきハ
- 6 帰鴈がね宰相更に立いでん心ちせで
- 7 あか[ちきイ]なくにかりのとこよを立別花の都に道や
- 8 まどはんさるべき都のつとなどよしある様にて
- 9 ありあるじのきミかくかたじけなき御をくりにとて

(44 ウ)

- 1 くろごま奉り給ゆゝしうおぼされぬべけれど風に
- 2 あたりてはいバへぬべければなんと[不濁点]申給よに有がた
- 3 げなる御馬のさま也かたみに忍び給へとていミじ
- 4 き笛の名有けるなどばかり人とがめつべきことハかた
- 5 みにえし給はず日やう／＼さしあがりて心あは
- 6 たゝしければかへりミのミしつゝ出給を見をくり
- 7 給けしきいと中／＼也いつ又たいめん給はらんとす
- 8 らんさり共[不濁点]かくてやハと申給ふあるじ
- 9 空ちかく飛かふたづも空にみよ我は春日の

(45 オ)

- 1 くもりなき身ぞかつハたのまれながらかく成ぬる

- 2 人ハ昔のかしこき人だにはか／＼ しう世に又ま
- 3 じらふ事かたく侍ければなにか都のさかひを
- 4 又みんとなん思ひ侍らぬなどの給ふ宰相
- 5 たつ[不濁点]がなき雲み独音をぞなくつばさ
- 6 ならべし友を恋つゝかたじけなく馴聞え侍りて
- 7 いとしもとくやしう思ひ給へらるゝおりおほくなん
- 8 と[不濁点]しめやかにもあらでかへり給ぬる名残いとゝ かなし
- 9 うながめくらし給やよひの一日[ツイタチ]にいできたる巳[ミ]の

(45 ウ)

- 1 日けふなんかくおぼす事有人はみそぎし給べき
- 2 となまさかしきひとの聞ゆれば海づらもゆか
- 3 しうて出給いとをろそかに軟障[ゼンジャウ]ばかりをひきめ
- 4 ぐらして此国にかよひける陰陽師[ヲンミヤウジ]めしては
- 5 らへせさせ給舟にこと／＼しき人がたのせてなが
- 6 すを見給ふに[補入も]よそへられて
- 7 しらざりし大海[ヲホウミ]の原にながれ来てひとか[不濁点]た
- 8 にやハ物ハかなしきとてゐ給へる御さまはれ
- 9 にいでゝいふよしなくみえ給うみのおもてうら／＼

(46 オ)

- 1 となぎわたりてゆくゑもしらぬにこしかた行きき
- 2 おぼしつゝ けられて
- 3 やをよろづ神もあはれとおもふらんをかせる
- 4 罪のそれとなければとの給に俄に風吹出て空
- 5 もかきくれぬ御はらへもしはてず立さハぎたり
- 6 ひぢ[補入か[不濁点]さ]雨とか降来ていとあはたゝしければ皆かへ
- 7 り給はんとするに笠もとりあへずさる心もなき
- 8 によろづふきちらし又なき風なり波いとかめし
- 9 く立きて人／＼ の足を空也海の面ハふすまを

(46 ウ)

- 1 はりたらんやうにひかりみちてかみなりひらめく
- 2 おちかゝる心ちしてからふしてたどりきてかゝる
- 3 目ハ見ずも有かな風などは吹どけしきづきてこそ
- 4 あれあさましうめづらか也とまどふに猶やまずな
- 5 りミちて雨の足あたるところとをりぬべくはら
- 6 めきおつお[ミセケチか]くて世はつきぬるにやと心ぼそく
- 7 おもひまどふに君ハのどやかに経うちずんじて

- 8 おハす暮ぬればかミスこしなりやミテ風ぞ夜[ル]も
 9 吹おほくたてつる願のちからなるべし今しバ
 (47 オ)
 1 しかくだにあらバ浪にひかれて入ぬべかりけり
 2 たかしほといふ物になんとりあへず人そこなハるゝ
 3 とはきけどいとかゝることはまだしらずと
 4 いひあへりあかつきがたミな打やすみたり君も
 5 いささかねいり給へればそのさま共[不濁点]みえぬ人きて
 6 など宮よりめしあるにハマいり給ハぬとてたどり
 7 ありくと見るにおどろきてさばうみのなかの龍王
 8 のいといたう物めでする物にて見いれたる也けりと
 9 おぼすにつとものむつま[ミセケチカ]しうこのすまゐたへがた
 (47 ウ)
 1 くおぼしなりぬ

注

- 1 整理番号：貴 3201/60 B。ソウル大学校中央図書館学内関係者向けデータとしてデジタル画像 (<http://sdl.snu.ac.kr/DetailView.jsp?uid=100&cid=560332>) がある。
- 2 保坂智、呉美寧「ソウル大学蔵『源氏物語』須磨巻の翻刻と考察（上）」（『北海商科大学論集』8 (1)、以下「前稿」はすべてこれを指す。
- 3 呉美寧「ソウル大学校蔵『源氏物語』の書き込みについて」（韓国『日本語学研究』54、2017年12月）
- 4 本文を引用するときは、丁数・表裏を算用数字とオウの形で、行数をその後に算用数字で示した。
- 5 「御 [ン] みづから」（15ウ3）とあり、「おん」あるいは「おほん」の最後の音節を示したものと思われる。
- 6 平仮名に振り片仮名をしたもの9例、平仮名に振り漢字をしたものが1例ある。

参考文献

- ・伊藤鉄也編『ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』「須磨」』（新典社、2013年10月）
- ・池田亀鑑編『源氏物語大成』（中央公論社、1951年1月）
- ・池田利夫『源氏物語の文献学的研究序説』（笠間書院、1988年）
- ・岡野道夫「証本源氏物語の本文について：日本大学図書館蔵本と宮内庁書陵部蔵本の性格」（『語文』21、1965年6月）
- ・大内英範『源氏物語 鎌倉末期本文の研究』（おうふう、2010年5月）
- ・大内英範「「青表紙本」が揺らいだ後：これからの源氏物語本文研究」（『文学・語学』206、2013年7月）
- ・加藤昌嘉『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版、2011年10月）
- ・加藤洋介『源氏物語大成』の三条西家本」（『詞林』42、2007年10月）

- ・加藤洋介「本文系統の認定をめぐる諸問題：書陵部蔵三条西家本源氏物語について」（『詞林』52、2012年10月）
- ・岸上慎二「源氏物語解題：三条西家伝之証本」『枕草子研究（続）』（笠間書院、1983年3月）
- ・京都大学文学研究科編『日本語の起源と古代日本語』（臨川書院、2015年3月）
- ・源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』3（桜楓社、1990年10月）
- ・源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成続』3（おうふう、2006年9月）
- ・清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書院、2003年3月）
- ・高田智和、斎藤達哉「『米国議会図書館蔵『源氏物語』について：書誌と表記の特徴』（『国立国語研究所論集』6、2013年11月）
- ・中古文学会関西西部会編『大島本源氏物語の再検討』（和泉書院、2009年10月）
- ・中島和歌子「『首書源氏物語 須磨』の頭注の翻刻と小考察（上）：山稜参拝と『白氏文集』の諷諭詩」（『札幌国語研究』5、2000年11月）
- ・中島和歌子「『首書源氏物語 須磨』の頭注の翻刻と小考察（下）：忘れ草、枕を二つ、琴の声と五節、這ひ渡る」（『札幌国語研究』6、2001年5月）
- ・新美哲彦『源氏物語の受容と生成』（武蔵野書院、2008年9月）
- ・藤井貞和「[解説]『源氏物語』本文の構築」（『源氏物語』2、岩波書店、2017年11月）
- ・横井孝、久下裕利編『源氏物語の新研究：本文と表現を考える』（新典社、2008年11月）
- ・『講座源氏物語研究 第7巻 源氏物語の本文』（おうふう、2008年2月）
- ・『日本大学蔵源氏物語 三条西家証本』3（八木書店、1995年1月）

【謝辞】

資料の閲覧に際しご高配を賜り、画像掲載をお認めいただいたソウル大学校中央図書館の関係各位に篤く御礼申し上げます。